

三耳の壺



挿絵：入澤良枝

昔々、千代田の保余原に、おじいさんとおばあさんが住んでいた。



おじいさんは働き者だったが、気の弱いおひとよしで、たびたび人にごまかされたり、騙されたりした。そのために働いても、働いても、暮らしぶりはいっこうに楽にならなかった。

おばあさんは逆に気の強い性格で、そんなおじいさんを少々頼りなく思っていたが、そこは「割れ鍋に綴じ蓋」というもの、互い支え合い仲良く暮らしていた。

ある晩のことだった。

おじいさんの夢の中に、観音さんが立たれてこう言われた。

「おまえは本当に正直で、まじめな働き者じゃ。一つ褒美をあげよう。明日の夜、一人で都倉山^{つぐらやま}に登りなさい。その頂上に宝物を埋めておいたから、それをおまえにあげよう。」



びっくりして目を覚ましたおじいさんは、おばあさんに相談すべきかどうか迷ったが、「一人で登れということじゃから」とおばあさんには内緒にして、翌日の真夜中、たった一人で都倉山に登ることにした。



月明りを頼りに、息を切らしながらようやく頂上付近まで登ってきた。ハーハーと荒い息をしながらふと前方を見ると、遠くの方に何やら大きな牛のような真っ黒い影がある。しかも、その黒い影がゆっくりと動いてこっちに近づいてくるように見える。おじいさんをにらみつけ、今にもとびかかってきそうだ。

おじいさんは急に怖気ついて、
「ばっ、化けもんじゃ、化けもんが出たっ」と、今登ってきたばかりの山道を転がり落ちるようにして一目散に駆け下りた。息を切らして家まで帰り着くと、震えながらおばあさんにわけを話した。

おばあさんは、その話を聞くと、おじいさんに腹を立てた。
「おじいさん、あんたあ、なんという情けない人じゃ。せっかく観音様が宝物をくれるとゆうに、怖くなって逃げかえったなんて。今からもう一回登ってきんさい。今度は私がついて行ってあげるけえ」

「いやあ…それじゃが…観音様は、一人で行けえいうことじゃった…」



「ほいでもおじいさん、一人でよう行かんのんじゃけえしょうがないじゃないの。何なら私が一人で行きましようかいの？」



「いやあ、わしの見た夢じゃけえ、わしが行かにやあなるまあが…。

ほいじゃが…またあの黒い化け物が出てきたら…怖いもう」

「つまらんことを言いさんな、化け物なんか、おりゃあせんよねー」

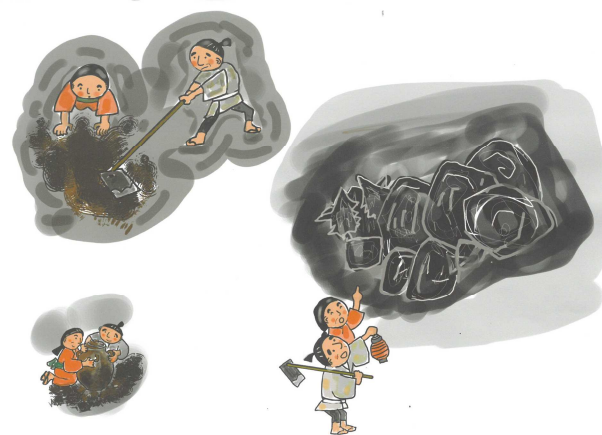
というので、おじいさんは、おばあさんに先を歩いてもらい、その後ろをおっかなびっくりについて、もう一度都倉山に登ることにした。

二人がようやく頂上付近まで登った頃は、少しずつあたりが明るくなってきていた。そして二人は先ほどおじいさんが化け物に出会った所に来た。

おばあさんは気丈にもじっと正面をにらみつけている。おじいさんもおばあさんの後ろから、おそろおそろ目を凝らしてみると、化け物かと思うたのは、ただの大きな岩だった。都倉山のてっぺんに、大きな岩が地中から突き出たように立っている。それがまるで黒い化け物に見えたのだ。動いたように見えたのは、おおかた、風に揺れる木の影だったのだろう。

おばあさんは

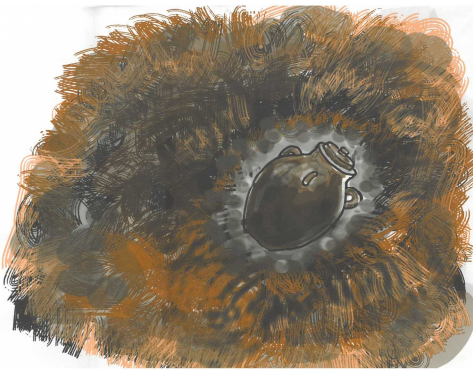
「おじいさん、見てみんさい。これはただの岩じゃ。こんなものに怖がるなんて、情けないことじゃ。さてさて、この下を掘れいうことじゃけえ、さあ、はよう掘りましようで。はよう掘らにやあ明るくなると人がやって来るけえ」



二人は力を合わせて、その岩の下を掘り始めた。しかし、掘っても掘っても出てくるのは石ころばかりで、なんにも出て来ない。

おばあさんは、いいかげん力も尽きて

「おじいさん、あんたあまた騙されたんじゃ。人がええけえ観音さんにまで騙されるんだよ。」



と言ったその時だった。おじいさんの鍬に何やらカチッと手ごたえがあった。「ありゃりゃっ。ここに何かあるでえ」と急いで周囲を掘ったら、一抱えもある大きな壺が出てきた。よくみると、口の周りに小さな耳飾りのような穴が三つありそこに紐をかけて、蓋がしっかりと結わえてある。

「出た。これじゃ、これが宝物に違いない。ホンマに観音さんが宝物をくれたんじゃ」

「ほんまじゃ、観音さんは騙したんじゃなかった。ありがたい、ありがたい」

二人は、大喜びでその壺を家まで大切に持ち帰った。

「さてさて、中に何が入っとるんじやろう？大判か小判か。それとも金・銀・珊瑚か…」

二人は期待に胸を大きく膨らませ、ワクワクしながら、結わえてある紐を切り取り、そつとふたを取ってのぞいてみると…

中には何やらベットリとした黒い泥のようなものが一杯詰まっている。しかし、どこにもお金や宝物のようなものは見あたらない。

おばあさんが、「きっとこの泥の中に宝物が埋まっとるんじゃ。川へもって行って、泥を洗い流しましょう

というので、二人で用心して壺を川までもっていき、中の泥を川へ捨てることにした。

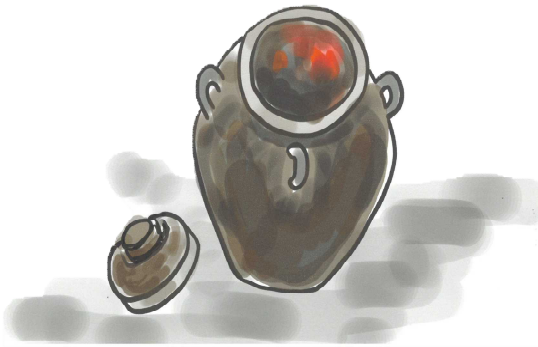
おじいさんが泥を一つまみ川へポチャンと捨てた。とたんに、目の前に不思議なことが起きた。川が、まるで血を流したかのように真っ赤に染まったのだ。

「なっ、なんじゃこりゃあ」と、二人はびっくりしてその場にへたり込んだ。

しかし、これはこの中の宝物を守る特別の泥で、この泥の中に宝物があるのに違いないと確信した二人は、中の泥を次から次に川に投げ捨てた。水はその度に、どんどん、どんどん赤く染まり、下流の方まで真っ赤な血のような川となって流れていった。



二人は全身を真っ赤に染めながら、最後の一塊（ひとかたまり）まで全部川に投げ捨てた。しかし、結局、壺の中には何も入っていなかった。



「やれやれがっかりじゃのう。やっぱりじいさん、わしらあ、観音さんに騙されとったんじゃ。とんだ『骨折り損のくたびれもうけ』じゃったのう。まあしょうがない。せめてこの壺だけでも、持ち帰りましょうかいの」と、壺を大切に家に持ち帰った。

その後、二度と観音様のお告げを聞くこともなかったし、生涯貧乏暮らしは変わることはなかったが、二人は仲良く暮らしたということだ。

けっちりこ